

2022年9月分総評 杉本真維子

「マスク姿の合唱コンクール／表情がない歌声」加藤万結子（愛知県）

これも「コロナ時代」の新しい光景。まだ誰も聴いたことのない歌声が文字のなかに響くようだ。文字はマスクでもあるのだろうか。

「笑いながら君が叩いた／手のひらの音／翌朝にはなくなっている」猫谷圭希（広島県）

強くて脆い私たちの生身。君の貴重な「音」をかたちにしてしばし留まらせることもできる。

「手の甲にテストターの跡 秋夕焼け」玻璃（愛媛県）

口紅やアイシャドウの美しいグラデーションと、不安定な夕焼け空がうまく重なっている。それは若さに対する烙印のようでもある。

「天井の高い図書館の、／あの席に孤独があるよ、」玻璃（愛媛県）

孤独を「在る」と認識し、数えたことがある気がする。孤独という言葉は「孤独」という一つの存在を指しているのかもしれない。

「排卵と同時に劇化した〈月夜〉／欺瞞に満ちた〈性〉を撃ち抜け」大嶋碧月（石川県）

繊細さを隠した挑発的な言葉もまた「欺瞞」を逃れられない。そのことへの痛みが鋭い「性」のように光っている。

「締め出され銀の芒でひらけゴマ」天山普美子（東京都）

限界をおしひらくイメージの力。孤独な心と貧寒の手足が「銀の芒」から別の次元へ脱出する。

「足下の闇を踏み抜き踊る盆」田崎森太（東京都）

霊鎮めのはずが、生者もまた死のきわで踊っている。清潔な白足袋と闇のくっきりとしたコントラストが美しい。

「古書店の観音開き小鳥来る」奎いう子（佐賀県）

「知」の暗がりについてとき光が射し込む。飛び込んでいく小鳥が私たち人間のようにいじらしく見える。

「気長に待つよ鉄塔引っこ抜いて秋」早川のり（愛知県）

ユーモラスでどこかほっとする。「気長に待つ」とはどういうことなのかを説明してもらった気がする。

「歌留多読めば獣みたいな子供の目」藤雪陽（長野県）

歌留多に夢中の子ども。獲物を狙う目つきに自立心の芽生えを見たのかもしれない。子の成長を見つめる親の目も背後に加わり、広がりのある作品になっている。

「封筒にどんぐりいれてみる眠る」大橋弘典（群馬県）

「みる眠る」のすわりがよい。その語感が封筒の底とともに球形の「どんぐり」を支え、転がらぬようにしっかりと受け止めている。

力のある作品が揃いました。次回も投稿をお待ちしています。